

絵画の中のはきもの

靴からのメッセージ

見一 眞理子

靴をモチーフに描いていると、街を歩いても、映画や展覧会を観ていても、ついつい「靴」に反応してしまう。どうもそんなセンサーが私の体の中に備わってしまっているようです。

会社勤めの限られた行動範囲内ですが、退社後に立ち寄った銀座のディスプレイケースの中でキラキラと輝くヒールや、スポットライトに照らされ上質を誇示するメンズなど、眺めているだけで仕事の疲れも吹き飛んでしまいます。丸の内の美術館でも思いがけずバーン＝ジョーンズが描いた『室内履きのデザイン』に遭遇した時は笑みを浮かべて絵はがきを買っている自分があります。そんな些細な出会いが私の創作意欲を掻き立て、モチベーションを保ってくれるエッセンス的な存在なのです。

靴はそれ自体が芸術品、オブジェです。そのままを模してもその美しさを超える作品なんて到底描けるものではありません。靴が体温を感じ、革が足に馴染んできて履く人の体型や歩く癖、そして生き様までが入り込んでやっと私のモチーフになります。なかなか他の方の履かれている靴を描くことは出来ず、父が作ってくれた自分の靴や、まだデザインを身に纏う前の木型を描くことが多く、ノスタルジックで古臭い作品と言われてしまいます。

とは言え、筆を持つ私自身は紛れもなくこの時代を生きているのですから、多様に

進化していくファッションやデザインが発信するメッセージを柔軟に受け止めるセンサーも養わなくてはいけないなあと感じています。現代の抱える憂いや喜びを感じてもらえるような画面作りをしてみたいと思っています。

余談ですが以前、私も一度だけ靴本体を作品にしたことがあるのです。父が作ったロングブーツ（何故かピンク色の革…）に直接絵の具で孔雀を左右に一羽ずつ配したちょっとサイケデリックなものでした。靴というカタチが世界中のクリエイター達の想像力を駆り立て、それぞれの世界観を自由に広げられる無限のキャンバスだと実感した瞬間でした。そして驚いたことに、その靴を気に入って買っていただいた時の感動は今も忘れられません。

そのブーツ、揃えて真っ直ぐ立った時に、一羽の孔雀が大きく羽を広げて見えるように描いたのです。その時代のファッションを反映し、夢を広げようとしていたその時の自分も込められていました。だからこそ、もっと靴の発する言霊をしっかりと受け止めなくてはと思います。